

15-a 思春期の精神衛生

慶應義塾大学医学部小児科学教室

秋山 泰子

1. 研究課題

出生時、子供の身体が母体と離れて独自の機能を発揮し始めたことに対比すれば、思春期には、子供の精神が親と離れて独自の機能を発揮し始めるということができよう。

思春期は第2の誕生といわれる。Hall が、“まったくすばらしい新しい誕生がある”と讃えたことが肯定される反面“思春機危機”の概念も肯定される。誕生はすばらしいと同時に危機である。ハイリスクバティを予防する為の精神衛生の課題を考えたい。

2. 思春期の精神発達段階

精神発達上の思春期は、Gesellが“発達是小児期の極みへ来て、新しい成長の力が創造的エネルギーを出張する”と表現し、Eriksen が、“子供時代の最後の終結段階”と指摘するところにある。もはや子供ではなく、かといって大人でもない。大人への移行期あるいは準備期といわれる青年期 adolescence の始まりのおよそ3年間、11・2歳から14・5歳に思春期puberty があるが、その上下限及び呼称は定まっていない。

3. 思春期精神発達の特徴

思春期精神発達の要因として、自我同一性(Erikson)、形成的思考(Piaget)、性愛(Freud)、個人・社会相互作用(生態学的観点)及び怒り(Gesell)などの発現があげられる。これらの発達にもとづいて、

親離れ、反抗、仲間結束、恋愛、社会的関心の高まりなどの特徴的な行動があらわれてくる。そのさいに、思春期以前の精神発達と現在の精神衛生とが、個性の発揮の基礎にありかつ影響を与える。

思春期迄の主要な精神発達段階は表に示した。(表)

4. 精神発達段階と精神衛生

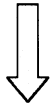
身体的発達と同様に精神発達においても、基礎からそれぞれの発達段階が達成されていることが、健康な思春期の発達達成の為の前提条件である。これが成されていることが、思春期の精神面のリスクの軽減に役立つことであり、思春期精神衛生の前提条件である。

5. 今後の課題

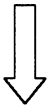
以上精神発達段階の観点から、思春期精神衛生の手がかりを得るべく、精神発達段階の整理を行った。

今後、思春期中心に発達援助の観点から精神衛生の対応を考える方向に進みたい。

また、諸種の事情によって、前段階が障害されているばあい、それを思春期に克服せねばならない。この対応方法における精神衛生対策も追究したいと考えている。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 研究課題

出生時,子供の身体が母体と離れて独自の機能を発揮し始めたことに対比すれば,思春期には,子供の精神が親と離れて独自の機能を発揮し始めるということができよう。

思春期は第2の誕生といわれる。Hallが,“まったくすばらしい新しい誕生がある”と讃えたことが肯定される反面“思春機危機”の概念も肯定される。誕生はすばらしいと同時に危機である。ハイリスクパティを予防する為の精神衛生の課題を考えたい。